未刊謡曲集

続十八

田中允編

古典文庫

未刊謠曲集

田中允編

古典文庫

古典文庫第五九三冊

平成八年四月二十日印刷発行　　非売品

編者　田中允（マコト）

発行者　吉田幸一

印刷者　共立印刷株式会社

製本者　(有)武蔵製本

未刊謡曲集　続十八

発行所　114　古典文庫

東京都北区西ヶ原三ノ三四ノ一二

電話〇三(三九一〇)二七一七

振替口座〇〇一九〇-九-一四五九七番

© KOTEN BUNKO 1996. Printed in Japan

目次

凡例……七
各曲解題……一一
本文
大般若天和観世流版本（三蔵・三蔵法師・玄奘？）……（一一）…一二一
大般若金剛流本……（一一）…一三〇
大般若六徳系本……（一一）…一三九
大般若復曲本……（一五）…一四六
丹後物狂下懸版本（橋立）……（一六）…一五三
丹後物狂明和改正本……（一六）…一六四

丹後物狂復曲本……（二二）…一七四
当願暮頭復曲本……（二三）…一八六
花盗人下懸系異本（保昌・花の縁・花折）……（二九）…二〇二
花盗人河村異本……（二九）…二〇八
花見書生……（三〇）…二一二
原木……（三三）…二一六
伏見異本（翁草・伏見の翁）……（三五）…二二六
伏見復曲本……（三九）…二三五
不断桜後藤版本……（四〇）…二四四
望恨歌……（四五）…二五五
松島新作……（五六）…二六四
松山異本（松山天狗・讃岐の院・新院・讃岐松山・

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

松山西行・白嶺天狗？）……（五八）……二七三
松山天狗金剛流現行曲……（五八）……二八〇
松山天狗復曲本……（六一）……二八七
深谷菊……（六九）……二九七
御渡異本（諏訪・神渡）……（七〇）……三〇六
武蔵野平成新作……（七二）……三一三
六玉川……（七五）……三二二
融通鞍馬異本（融通・鞍馬詣）……（七七）……三二九
鞍馬下懸系異本（鞍馬源氏）……（八一）……三三六
鞍馬源氏金剛流異本（鞍馬）……（八一）……三四二
河水金剛流異本（渇水）……（八三）……三四六
渇水龍女河水の改作復曲本……（八五）……三五二

原　城……（八七）…三六五
銭懸松……（八九）…三七七
郭　巨別曲……（九四）…三八六
〔続追加〕
淡　路米沢異本（淡路島・楪葉・於野子呂島）……（九五）…三九四
淡　路明和改正本……（九五）…四〇二
異　馱天米沢異本（律師）……（九七）…四〇九
韋　陀天福王流系異本……（九七）…四一四
浦　島米沢異本（龍神浦島・浦島龍神・亀浦島）……（九九）…四二〇
鱗　形米沢異本（いろこがた・時政・一番鱗形？）……（一〇三）…四二九
鱗　形福王流系異本……（一〇三）…四三二
鱗　形金剛流現行曲……（一〇三）…四三四

岡　崎米沢異本……（一〇五）…四三八
追掛鈴木米沢異本（生捕鈴木？）……（一〇八）…四四四
刀　米沢異本箭扒（刀の庄・石子積・刀殿・箭扒・
　　笈渡し？　刀荘？）……（一一〇）…四四六
神　有　月米沢異本（大社・神無月・十束・十束の剣？）……（一一三）…四六六

追記・訂正……四七二

凡例

一、本文庫の『番外謡曲角淵本』正続二冊計五十二番、『未刊謡曲集』三十一冊計一五二六番、合計一五七八番、『謡曲叢書』三冊、『新謡曲百番』、国民文庫本『謡曲全集』上下巻、国書刊行会本『宴曲十七帖附謡曲末百番』、日本名著全集本『謡曲三百五十番集』、『謡曲評釈』九冊（謡曲叢書本以下は重複曲多く、重複しない総数は約六百番）などの、図書館などで比較的閲覧し易い、まとまった諸本にみられる曲を除き、この続第十八冊では遺漏曲の中「大般若」から「神有月」までの四十四番を翻刻した。

二、翻刻はすべて原本通りを原則としたが、私意を加えた所はすべて（　）でくくった。また各曲解題の所でも、原典を引用した所の中の私註は同様に（　）でくくった。

三、原典には段落のない場合が多いが、編者の見識で適宜改行した。

四、節付は印刷の都合上省略せざるを得なかったが、稀に節付のない写本もあ

り、また活字翻刻本しか見当らない曲は勿論節付省略本であるから、これらは原典に既に節付がなかった曲である。これらの点は解題で触れた。

五、「次第」「一セイ」「舞」などの演出上の重要記号はできるだけ残したが、囃子の打切を意味する「打切」「切」「ウ」、間拍子を意味する「ヤ」「ヤア」「ヤヲ」「ヤヲハ」、地拍子を意味する「トリ」「片地」「ヲクリ」などの特殊記号は省略した。

六、「印は原典に固執せず、詞の所（節付のない所）は「、節の所（ゴマ譜のある所）は〳〵を付けて区別した。

七、句点は原則として原本通りにしたが、元来句点は節譜の一種であって（句点は必ずそこで息を一旦切り次を謡えという謡い方の記号）、韻文の切れ目とは必ずしも一致しないから、韻文（節付のある部分）の拍子合わずの所は七五調を基本とする一節を原則として一句と考え、拍子合いの所は八拍子を基準とする一区切を一句とし、これらの区切の所に編者の見識で句読点を付けた。この場合原典に句点のあるものはそのままにし、句点のないものは読点

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

を付けて区別した。また詞の所も原本が句点を脱していると推察される場合は、これまた編者の見識で読点を付けた。謡本に読点はない。

八、濁点は、原本にある場合、異本を参考にして補った場合、編者の見識で補った場合の三つに分けられるが、清濁いずれか決し難い場合はそのままにした所もあり、また注意すべき所は括弧でくくって私見を述べた。

九、曲名の下の〔　〕でくくった番号は、未刊謡曲集一の最初の曲を一とし、それからの通し番号である。したがって角淵本番外謡曲からの通し番号は、これに五十二を加えればよいことになる。

十、謡曲の専門的な術語については、『未刊謡曲集』三十一附載の拙稿「謡曲の音楽的研究」を参照して頂きたい。但し右の拙稿には校了後、組版の時に印刷所側に過失があり、二二五頁の初行全部を二二四頁の初行に移行して読んで頂きたい。

本巻作製にあたっても大勢の方々の御厚意による所が多いが、中でも故人では石田元季・井上嘉介・江崎金次郎・江島伊兵衛・観世左近・高安六郎・

横山杣人、現存の方では、伊藤正義・梶井厚佑（旧名達男）・春日井弘三・河村隆司・観世喜之・多田富雄・堂本正樹・中森晶三・西野春雄・平林直子・平原さや子・平松令三・藤城継夫・前西芳雄・味方健・吉田幸一の諸氏、また解題中に述べた各公共機関の暖い御協力を得た。厚く御礼申し上げる。

（一九九四年八月七日記す）

各曲解題

大般若（だいはんにゃ）異本。別名…三蔵・三蔵法師・玄奘？『謡曲叢書』第二巻に翻刻されているが、誤読誤植校訂ミスもあり、最近復曲もされたので、近世の版本類や金剛流本などの異本も加え、異本として翻刻し、復曲本も次項に翻刻することにした。伝本は多いが、大別して次の三種類に分けられる。①謡曲叢書本（校註日本文学大系謡曲集下巻にも翻刻）。②近世の版本系。③金剛流系。④金春流六徳本系。②の相互間にもそれぞれ小異があるが、③の二本は殆ど同文。

②は、表章氏の『鴻山文庫本乃研究』四五〇頁によれば、観世流の明暦三年（一六五七）四月の野田弥兵衛刊本が最も古く、下懸系の版本にはない。家蔵にあるのは、天和二年（一六八二）三月京都田中理兵衛刊本が最も古いのでこれを底本とし、手もとにある、天和三年（一六八三）十月京都山本長兵衛刊本・元禄八年（一六九五）五月同じく山本長兵衛刊本・延宝頃（一六七三～一六八一）の二番綴無刊記版本・近世後期写しの紺

表紙五番綴の型付入り写本・延宝七年(一六七九)写しの高安流(ワキ方下懸節付)写本(前記諸本とは異文比較的多し)などを参照し、注意すべき異同を註して翻刻した。外に福王流系の吉田本(別名三蔵)・福王本(三蔵法師)もほぼ同文。

③は、米沢上杉家蔵の米沢本第一種(翻刻底本。装束附・型付入)と同第二種とで、共に金剛流節付、両者殆ど同文。

④は近世中期頃写しの法政能楽研究所蔵の六徳本(天和元年(一六八一)十一月西森六兵衛・吉田徳兵衛刊本と同系の本文を持つ金春流謡本)系本(翻刻底本)及び仙台本第一種で、これは前記①②③とはかなり違った異本。外に丸岡桂氏旧蔵古写本(関東大震災で焼失)・石田本・京大本・観世宗家蔵古写本・鴻山文庫蔵了随本・上杉本(目録に「三蔵トモ」)・天理図書館蔵三百五番本などもあるが未調。

『未刊謡曲集』十九所収の「三蔵法師」は同工異曲。

大永四年(一五二四)四月上旬成立の『能本作者註文』に作者不明とあり、近世の笛の頭附類にも笛の譜が見える。その一例として、家蔵近世中期頃写しの森田流の笛の頭附の要点を示すと、初めに屋台が出、前シテは真ノ一声だが、草ノ一

声にもとなって居り、後の天女は渡り拍子（下り端）で出てそのまま五段の舞（現行曲国栖のような下り端五段の舞）となるが、金剛流は渡り拍子がないとある。後シテは早笛で出て「吉事は日夜に極りなし」の所に舞働が入るとなっている。貞享二年（一六八五）版『観世当流小謡』上巻（元禄十三年一七〇〇にも求板本あり）には「大般若」と題して、前シテ上歌の「入りつるかたも白波の…山路はいづくなるらん」を記しているが、本曲のこの前の一声・サシ・下歌からここまでは、現行曲「石橋」のそれを少し変えて借用している。また延宝年間（一六七三～一六八一）以後、享保二年（一七一七）以前、多分正徳（一七一一～一七一六）頃の成立らしい法政能楽研究所蔵の『上杉本乱曲集』（能楽資料集成十八、一九九三・八・二五わんや書店刊）には「三蔵大般若共」と題して、本曲のサシ・クセを記している。

米沢本第一種にはかなり委しい装束附と型附とがあり、復曲時にこれを参考にした由であるが、装束附は次のようである。（句読点筆者附加）

一、作物、台一ツ、山ニ引廻、大小ノ前へ初ヨリ出ス。中入後、真蛇の御姿ト、引廻トル。

一、連男(つれ)、茶筌髪、ノシメ、水衣、コシ帯、扇。

一、太夫、三光、尉髪、小格子キナガシ、杖右ニツク、水衣肩取ル、腰帯、柴ヲヲヒ(オ)、スツルトキトル。

一、後太夫作物ノ内也、シカミ、赤頭(がしら)、唐織厚板、半切、腰帯、扇修羅、笈ノ中ヘ経ヲ入(レ)テ肩ニカクル。筒桶作物ノ中ニテカ(掛)クル。

一、天女二人、如常(つねのごとし)。

間狂言は『狂言集成』に見える。『能楽タイムズ』一九七九年一一月号所載、堂本正樹氏の「番外曲水脈(六)」で本曲に対する所感が述べられている。「大般若」としての古い演能記録はないが、『看聞御記』永享四年(一四三二)三月十四日の条に、伏見御所で矢田猿楽が「三蔵法師」を演じている。これは同工異曲(未刊十九所載)の三蔵法師かもしれないが、伝本の多い本曲を指す可能性が強い。狂言方名女川辰三郎伝書(川上伊兵衛氏蔵)所収『川上本謡目録国付』に「玄奘」の別名を「三蔵」としているから、本曲は「玄奘」とも別称されたかと思われる。復曲「大般若」については次項で解題。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com